

# 木質内装材の活用とそのインターフェースとしてのデザイン

北海道立工業試験場 工芸部工業デザイン科長 安田 公彦

## 1 はじめに

最近、産業界を始め色々な分野で、デザインという言葉が頻繁に使われています。

デザインに関わる領域も、製品開発や宣伝・広告などから地域開発計画など環境・空間にまで広がってきており、さらに企業における経営戦略（デザインマネージメント）など、目に見えない分野へも進展してきています。

それでは「なぜ今デザイン」なのでしょう。

昨年度の中小企業白書などでも指摘されているように、生活水準の向上、生活意識の改革によるライフスタイルの変化、女性の社会進出、高齢化社会への移行などによる消費構造の高度化、多様化、個性化、あるいは技術革新、情報化などの進展や多極分散型の地域活性化の要請などによって、企業活動がますます高度かつ複雑なものとなってきています。

一方、今日、人々の物質的欲求は満足され、「もの」よりは「こころ」の充足を志向し、快適で潤いのある生活環境を求めようになりました。したがって人々のより高次の感性に応える「もの」、「こと」の在り方としてデザイン活動が重要となってきました。

このような社会現象は、人々のニーズの変化に対応して、人と「もの」（生活と産業）をより良い関係で結びつけるインターフェースともいえるべきデザインの機能をさらに一層重要なものとしているのです。

従来までの量産型デザインというか、製造側に立ったデザイン活動だけでは、かならずしも製品

は売れなくなってきました。

私はこれを、アクセル的デザインからブレーキ的デザインへの変化と言っています。

今日のデザインの概念やその具体的な活動が従来にまして複雑になり、難しくなってきた理由がここにあります。

最近の工業製品は、その基本となる機能や性能の他に、プラスアルファとしての要素、すなわち、その製品を介して人々が感じる精神的充足感=意味的価値が強く要求されてきています。

インテリアエレメントとしての内装材や家具は、使用者の意志や感性が強く関わる製品だけに、その影響は大きいと思います。

このような背景のもとで、インテリアに木質材料を活用しその需要拡大を進めて行くには、木材に対する価値観もより精神的な側面からとらえる必要性があります。

従来良く見られた他材料の代替的利用法では十分とは言えないでしょう。強度、断熱、遮音などの要求される物理的性能の適用技術や加工、施工技术などの追求に加えて、使用者の要求を取入れ、美的に調和した心地よい住空間を提供し、他の材料との違いや特徴をできるだけ明確にする差別化が必要です。

ここでは以上の観点から、デザイン活動を人-もの（需要-供給）のインターフェース機能としてとらえ、木質材料の需要拡大へ向けたシーズとしてのデザインの可能性について考察しました。

またさらに活動の具体例として、木質材料の需要（ニーズ）-供給（プロデュース）方法の高度

化、プレゼンテーション技法の発展（デザインングメソッド）について紹介することとしました。

## 2 需要拡大へ向けたシーズとしてのデザインの可能性

### (1) 北の風土と北海道デザインの可能性

従来、地域のデザインの多くは素材や特殊な技術の移入などに基づいて展開してきました。しかしこれ以外にも、地域の風土や感性、環境といった因子があり、それを生かしたデザインの追求は、地域独自のデザイン創出の可能性につながっていくはずで

一方、デザインの分野にあつては、画一的国際主義や機能主義的デザインからの脱却と地域特性や個性の重視という方向へと向かっています。

現在、情報や流通機構の高度化に伴って商品の市場は世界的規模に拡大しつつあります。つまりこのことは、それぞれの地域が持っている特性の中から新しい価値を見出しそれをデザインに結びつけていくなれば、地域の独自性や個性の創出ということのみにとどまらず、国際的に受け入れられる可能性があることを意味しています。

伝統産業のない北海道は、過去や伝統へのしがらみがない風土ともいえ、その意味で新しいものを受け入れる素地をもっており、思い切ったデザインの展開を可能にしていく環境があるといえます。

また我が国のデザインの展開はマスプロ時代、すなわち「もの」の充足を目的とした画一的で大量生産的な「アクセル的デザイン」から、人間性にもとづいた制御可能な「ブレーキ的デザイン」へと変革しています。

北海道がこの新しいデザインの波に乗って進むことは、先進地域と同じ出発点に立ってスタートできることであり、伝統がなく過去に固執しない北海道の風土にとっては都合の良い現象といえます。

さらに北海道のもっている豊かな自然や寒冷な気候は、そこに住む人々にしかわからない独自の感性を育み、地域の生活環境についても独自のニ

ズを生み出します。例えば冬季間の各種イベントの開催、住宅や都市に対する取り組み、防寒衣料や冬のスポーツウェア、木材を生かした家具や建具など多くあげられます。またこれらの独特のニーズが、地域の製造業者を刺激し、産業として発展している例もあります。

このように北海道の気候・風土に立脚したもので、さらには固有の素材を生かした商品が、まだ小規模とはいえ産業として成立してきていることを踏まえ、さらに北海道の生活を掘り下げ、北の環境や素材について見直し、多角的な検討を行っていくならばより多くの北海道的デザインの可能性が拓けてくるでしょう。

### (2) ライフスタイルの創出と定着

北海道は日本の中でも洋風化が進んでおり、西洋的なライフスタイルが定着しています。これは新しく開拓された地域であり、寒冷積雪といった厳しい自然環境が新しいライフスタイルを受け入れ定着させる背景となっているためかと思えます。

<和と洋>、<東洋と西洋>の接点という視点でみると、独特の気候・風土やライフスタイルをもった北海道はその両方を受け入れ、融合し、独自の文化を培う土壌をもっているといえます。この土壌で生まれた柔軟な感性は、新しい試み、デザインの展開を世界へ向けて発信していく大きな可能性を秘めています。

生活をデザインの視点からトータルに捉えてみることも重要です。インテリアも構成するエレメントのレイアウトのみにとどまらず、生活を演出するために必要なものをそろえ、その使い方も含めた捉え方が大事です。言い換えれば、インテリア産業とは生活のあり方を情報化し発信する情報産業であるといえます。

例えば、欧米諸国の住生活にみられるような照明の演出効果などは、住空間そのものが「もの」としての機能をもっているといえます。食事の仕方一つとっても家族のつながりに大きな影響をあたえるものです。このような目に見えないソフト面をも含めたトータルなライフスタイルを提案し啓発していく必要があります。

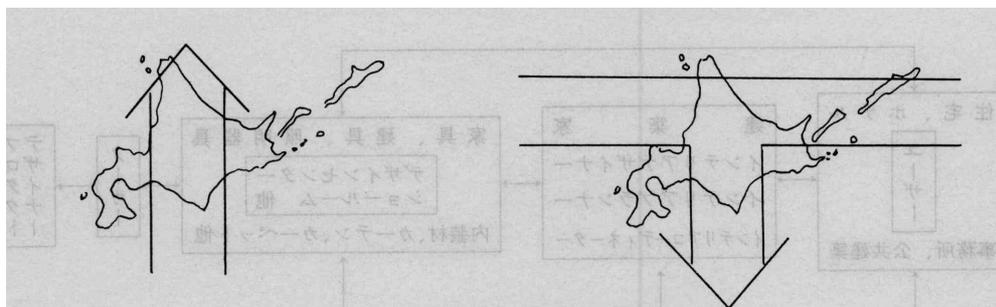


図1 I型情報受信とT型情報発信

### (3) I型情報受信からT型情報発信へ

北海道を日本の中だけで見ていくと、東京一極集中構造の中で国内のマーケットは東京が握っており、北海道の入り込む余地は極めて少ない。一方、地理的にも北端の地に位置し、大半を占める温暖な地域の中にあつて積雪寒冷の地域は少数派であり、種々の面で異端視されてきました。

生活文化の基礎が本州からの移入であり、過去においては生活にかかわる多くの「もの」の情報が受信するのみの一方通行であったため、世界を直接的にあまり意識してきませんでした(図1)。

従来、北海道でデザイン開発された商品は、国内では「マイノリティ」であったが、北海道の気候・風土が世界、とりわけ北方圏地域に受け入れられ易い素地をもっているなど、今後は世界へ目を向けて行くことによって国内では全く考えられない市場が生まれ、日本の中での「マイノリティ」を世界の中での「マジョリティ」に変えていくことが可能でしょう。

北の風土での生活文化の向上が進む今日、国際的視野、特に北方圏諸地域とのデザイン交流を深め、北海道独自のデザインを確立し、国際化をめざして進むべきでしょう。

## 3 需要 - 供給方法の高度化

(1) 情報化時代の中で、住空間における木質内装材の利用拡大を進めるためには、インテリア産業界、コンストラクト市場へのより一層の参入を図る必要があります。このためには関連企業や専門家、エンドユーザーなどのかかわりを深めた組織化を構築・整備することが重要です。



写真1 ロス郊外のデザインセンター



写真2 住宅地帯にある内装材専門店

インテリア産業の先進国であるアメリカを例にとれば、専門家(インテリアデコレーター、デザイナーなど)を対象に情報を視覚化したデザインセンターやショールームなどが主要都市に設置されており(写真1)、エンドユーザーの需要を具体的に捉えるために内装材などの資料も貸し出してもらえます。また郊外の住宅地区には内装材の専門のショールーム(写真2)があり専門家のアドバイスも得られます。

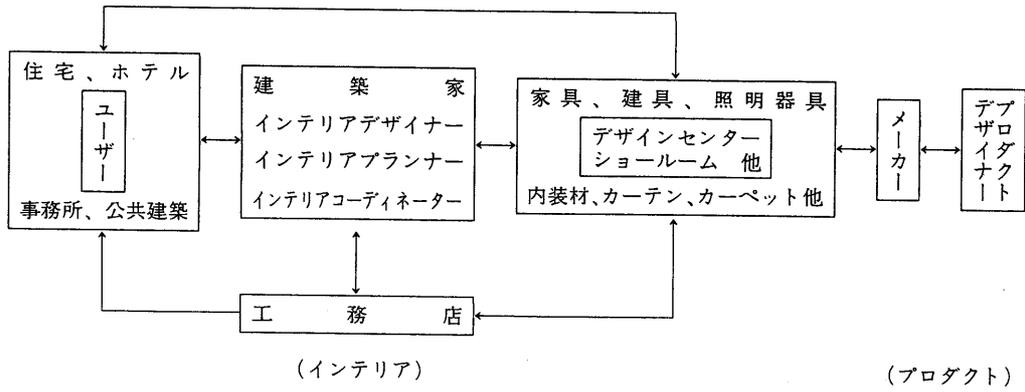


図2 インテリア産業におけるデザイン活動のかかわり

(2) インテリアに関する専門家の台頭

最近、我が国におけるインテリアコーディネーター（通産省認定）やインテリアプランナー（建設省認定）の誕生は、インテリア産業の成熟と今後の発展を示すものであり、従来からのインテリアデザイナーや建築家と共に快適な住空間を求めるユーザーの需要を把握する受信者となっており、また同時に企業への情報発信者ともなっています（図2）。

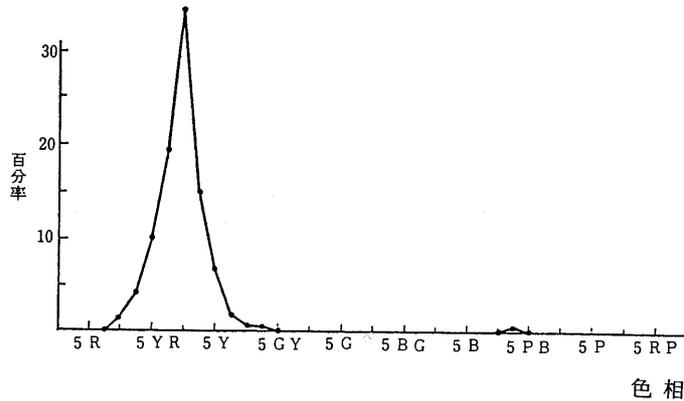


図3 木材の色相頻度

に多くが納まっています（図3）。

木目の視覚特性

木質内装材の大きな特徴として、自然なパターンとしての木目が挙げられます。木目は木材のもつ材質感を視覚からイメージさせる強い力を持っており、心理的には「あたたかい」「なごむ」などが感じられます。これに関する調査例として京都大学農学部増田稔助教授の報告があります。この調査はランダムに線が交差することによりイメージがどのように変化するかというもので、複雑に線が交差しがない方が「落ち着きのある」「すっきりした」イメージを与え、良いイメージを与える一つの要因であるとしています。

住宅内装材としての利用条件の想定

住空間の構成は多様ですが、その空間の大きさには一般にそれほど差異はありません。したがっ

4 プレゼンテーション技法の発展

(1) 木質内装材の利用と留意点

人は秩序を求め、そうした中から安定感を覚え、美的意識を感じるといわれています。木質系の内装材を用い、室内を構成する場合においても基本となる造形理論や色彩理論などについての理解は当然のこととしても、木材のもつ視覚特性についても留意しておく必要があります。

木材の持つ色彩

内装材としての木材は、加工性、保温性などに優れ、利用者に柔らかくて暖かい感じをいだかせます。これは、木材のもつ材質や色調が影響するためです。一般に使用されている木材をマンセル系で調べた値では、色相が5YRから5Yの範囲

て住宅の空間を考慮した場合、木質内装材の利用に対してある程度の条件が想定されます。

- ・組み合わせ幅は2~3種類程度が良好です。
- ・木目と配列の組み合わせを反比例させます。  
(木目が複雑であれば配列は単純化)
- ・壁材においては、木目は上部に行くほど単純なものとした方が安定感があります。
- ・色彩的には、天井など上部は明度を高くし、床など下部は明度を低くすると、まとまりやすく落ち着いた感じがします。
- ・配列を強調する場合はV溝など目地を入れると効果が上がります。パターン展開時の目地のつながりに注意します。
- ・塗料は材質感を生かすために、あまり光沢を出さない仕上げとします。

## (2) インテリアデザインのプレゼンテーション

一般にインテリアデザインのプレゼンテーションとしては、平面図やエレベーションなどの図面類と透視図法などによる室内パースが主なものですが、最近では材質感をできるだけ表現したモデリングで行うことが多くなってきました。また2次元的な表現においても実際に使用する内装材を用いたり、家具や照明器具などのインテリアエレメントもメーカーのカatalogなどを付加し、できるだけユーザーの理解を得ることに配慮しています。

## (3) コンピュータシステムによるシミュレーション技法

最近、デザイン開発における作業性の向上やデザイン決定に対する道具として、コンピュータシステムの利用が増加してきています。この背景としては関連ソフトの開発、スキャナーやカラープリンタなど入出力装置の性能向上、いわゆるコンピュータ関連技術の発展がありますが、デザインの作業が視覚的なシミュレーションを必要とすることも大きな要因です。

ここでは、その具体例として倶知安林務署の内装工事の色彩設計に画像処理装置(16ビットパソコン、フルカラーフレームメモリ、2Dペイントソフトウェア、カラーモニタ、ビデオカメラ)を

利用した内容について紹介します。

内装材はトドマツ羽目板を壁面材のメインに、カラマツセメントボードを腰壁の部分に使用しました。写真3は改装前のもので、これに画像処理装置を用いて供試材をマッピングした例が写真4です。



写真3 改装前の林務署事務室



写真4 画像処理装置によるマッピング

トドマツは素材感を生かすために、イエローブラウン系の若干の着色にとどめ、腰壁の部分のカラマツセメントボードはダークブラウン色にし、重量感をもたせ、またトドマツの明るさとの対比効果を意図しました。

写真5は改装後のものですが、画像処理装置を用いて検討したものとほぼ一致する結果が得られました。図4は画像処理装置の色彩設計への利用を表したものです。



写真5 改装後の林務署事務室

## 5 おわりに

我が国における繊維業界や弱電，照明業界などがインテリア産業として関連産業との総合的な展開を急速に進めつつある今日，木材木製品業界の対応がいまだに従前のままであるとの感を受けるのは，私一人でしょうか。

情報化社会の中で産業のソフト化が進む時代において，北海道は資源としての木材の価値に頼りすぎ，いまだ材料の一方通行だけに終わっていないでしょうか。

この機会に木質材料をインテリアの構成材料として活用するための今日的な課題について，デザインの側面からその可能性について紹介しましたが，多分に私の北海道に対する思い入れと偏見があるかと思えます。

住生活の豊かさは心の豊かさを無くしてはありえません。快適な住空間も構成材料だけではなしえません。近い将来，木質材料をより良く理解

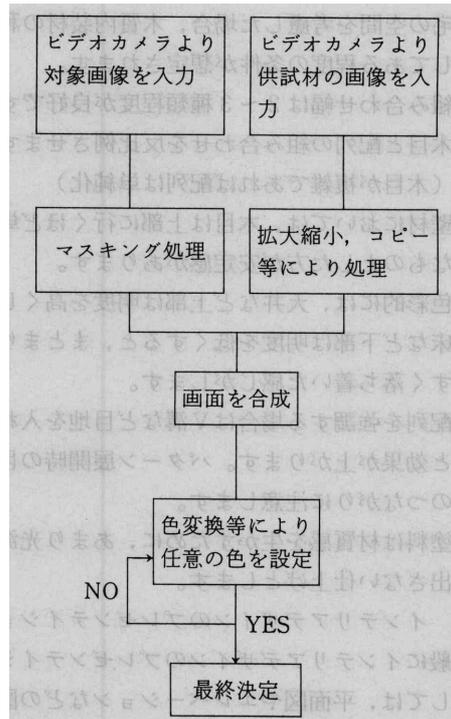


図4 画像処理装置の色彩調整への利用

した使い手と担い手による北の風土からの豊かで快適なライフスタイルの発信が醸成し拡大して，インテリア産業への活性化に結びつくことを期待したいと思います。

本稿は日本木材学会北海道支部第20回研究会（平成元年7月）「木と住まい」にて講演した概要の紹介です。